

JAによる 援農ボランティア 取組事例集

事例1 JAふじ伊豆（なんすん地区本部）

事例2 JA相模原市

事例3 JAセレサ川崎

事例4 JAあいち海部

令和7年2月

目次

援農ボランティアの取組み	2
事例1 J A 富士伊豆（なんすん地区本部）	3
事例2 J A 相模原市	7
事例3 J A セレサ川崎	13
事例4 J A あいち海部	17

援農ボランティアの取組み

援農ボランティアの取組みとは、農業者が抱える人手不足に対して、農業に関心があり、農作業のサポートを行いたい地域住民等が「援農ボランティア」として農作業を支援することです。



J Aふじ伊豆（なんすん地区本部）

1 特産品目の収穫作業に特化した 援農ボランティアの取組みを実施している事例

事例の特徴

1. J Aによる事前研修は実施せず、受入農業者が現地で指導を行うことで特産品目を中心に多くの農家が援農ボランティアを受け入れているケース（新規援農ボランティアの場合、職員の初回立ち合い有）
2. J Aは、農業者と援農ボランティアの募集活動やマッチングに専念する

取組みの効果

1. 1年間で受入農業者：約50戸、援農ボランティアの延べ参加人数：約1,400人となっており、特に繁忙期での農作業人員の確保につながる
2. 参加する援農ボランティアはリピートする人が多く、農作業による農業者の支援を前向きに捉えており、「地域の農業応援団」が増加している



（1） J Aふじ伊豆（なんすん地区本部）の基本情報

- **J Aふじ伊豆なんすん地区**： J Aふじ伊豆における旧 J Aなんすんの所管する地区
- **所管エリア**： 静岡県沼津市、裾野市、長泉町、清水町
- **主力品目**： 西浦みかん、沼津茶、長泉四ッ溝柿、玉葱、キンカン「こん太」等

※ J Aふじ伊豆は令和4年4月1日に静岡県東部地区の8 J Aが合併し発足。本事例は現在のなんすん地区本部及び旧 J Aなんすんの取組みについて紹介

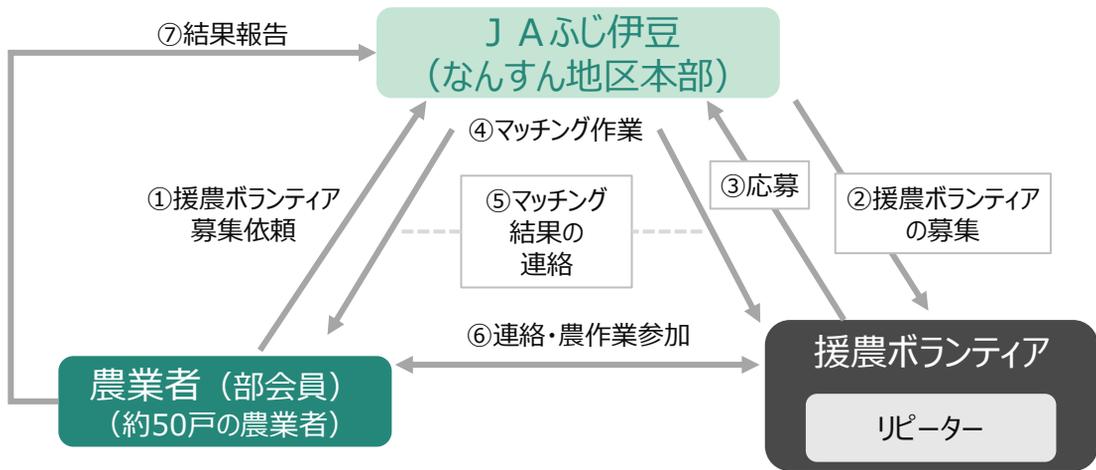
（2） 援農ボランティアの取組みについて

- **担当職員**： なんすん営農経済センター 地区営農課職員 1名（年間従事割合：全体業務の5割程度、みかんの収穫期には農業者・援農ボランティアのマッチング作業に専念）
- **ボランティアの対象品目・作業内容**： みかん（収穫作業）、茶（収穫作業）
玉葱（収穫作業）、柿（摘果・収穫作業）、キンカン（摘果・収穫作業）
- **ボランティアの特徴**： 60代以上が過半数、リピーターが8割を占める

（3） 取組みを始めた経緯

- 地域農業者の人手不足を受け、2010年度からみかんの収穫作業を対象品目として、援農ボランティアの取組みを開始。次年度に茶、次々年度に柿を対象品目として追加し、徐々に取組みを拡大
- みかんや柿などを対象品目としている理由としては、①農業に親しみのないボランティアでも収穫がしやすい、② J Aふじ伊豆（旧 J Aなんすん）の特産品という観点から選定
- 援農ボランティア事業の拡大は「地域の農業応援団を増やす」という意味合いで取り組んでいる

（４）取組体制図



（５）取組みフロー（詳細）

① 援農ボランティアの募集依頼	援農ボランティアの対象品目を営む農業者から「援農ボランティアの募集有無・受入可能人数・時期・集合場所・日程調整方法など」を確認（農業者が記入する用紙を用意し、J Aが受領する形で実施）
② 援農ボランティアの募集	HPやSNS, 広報誌を通じて広報し、J Aが援農ボランティアを募集（援農ボランティア向け応募用紙は紙媒体の配布だけではなく、WEBでの申込みにも対応）
③ （援農ボランティアによる）応募	基本情報（氏名・住所・参加可能日など）を記入の上で、援農ボランティアがJ Aに応募用紙を提出またはWEBで申込み
④ マッチング作業（日程調整）	援農ボランティアの応募内容にある希望品目・日時を踏まえて、農業者と援農ボランティアのマッチングを実施 → 本事例（6）③に追加説明
⑤ マッチング結果の連絡	マッチング完了後、J Aから援農ボランティアと農業者の双方に、お互いの連絡先とマッチングしたスケジュールを通知
⑥ 連絡・農作業参加	必要に応じて、双方で農作業参加に必要な情報のやりとりを実施 J Aの事前研修はないため、農業者が援農ボランティアに直接指導 → 本事例（6）①②に追加説明
⑦ 結果報告	農作業終了後、農業者がJ Aに受入人数などを報告

（6）特徴的な取組内容とポイント

☑ ① 農業未経験者に対する農業者による直接指導

J Aによる事前研修を実施せず、農業者が直接指導する形式を取る

この形式を取ることで、J Aの指導員数に依存せずに、より多くの農業者が援農ボランティアを受け入れることが可能です。

Point

- 新規の援農ボランティアに対しては農業者が直接指導することを、農業者に対してしっかりと伝えていきます（収穫方法などを記載した事前配布物を用意している農業者も一部存在）
- 初めて援農ボランティアを行う方には、援農ボランティアでも実施しやすい作業（収穫作業など）に限定するなど工夫をしています
- 援農ボランティアはJ Aの負担でボランティア共済に加入し、安全面に配慮しています

☑ ② 謝礼の工夫

援農ボランティアへの謝礼に農作物を渡すことで、援農ボランティアの魅力を高める

農業者が交通費1,000円に加えて、謝礼に農産物（みかん10kgなど）を渡しています。謝礼を渡すことで農業経験に加え地元の特産物の魅力を感じてもらうことができ、新規参加者やリピーターを確保することにもつながります。

Point

- 謝礼の内容は毎年見直しを行い、J Aと生産部会の間で協議・決定をしています
- その協議では、募集の量に応じて、謝礼として渡す農産物の量を調整しています（例えば、募集者が想定より多かった場合は、謝礼の量を調整することもあります）

☑ ③ リピーターの確保

リピーターを増やすための工夫を行うことによって、リピーターが全体の8割を占めている

リピーターの参加は、農業者の負担軽減につながる傾向にあります（直接指導が不要、作業の質が高い等）。J Aとしてもリピーターを確保するため、農業者とともに以下の工夫を行っています。

Point

- リピーター確保に向けて以下のような工夫をしています
 - i. 基本的には、昨年と同じ農業者と援農ボランティアをマッチング（マッチングするペアを固定化することで指導時間の低減やコミュニケーションの促進につながる）
 - ii. リピーター向けの募集案内をJ Aから展開
 - iii. 活動後に実施するアンケートの結果や、時より行う現場見回りの際に声掛けを行うなどして、援農ボランティアの状況把握と改善を行っています

（7）担当職員の声

Q. 援農ボランティア事業の人手不足解消以外の効果を教えてください。

- 援農ボランティアは農業者の人手不足解消とともに、**消費者と農業をつなぐ取組みになっています**。例えば、**消費者と農業者との交流の機会づくりや、参加者にJ Aふじ伊豆の農産物を知ってもらうきっかけになっていることは、地域全体のメリットだと感じます**。
- また、ボランティア事業を通して、「みかんの収穫作業は人海戦術である」ことを**肌で感じる事ができています**。J A職員として、農業者に直接的な支援を行うことはメリットだと考えます。
- 他の多くのボランティアの方が参加できるような仕組みを、今後もJ Aとして考えていきたいと思えます。



担当職員

（8）農業者の声



農業者（みかん）

Q1. 援農ボランティアとのコミュニケーションで意識していることは何ですか。

- 収穫の際には、腐っているみかんや鳥が食べたみかんを収穫カゴに入れないように、ボランティアの方々にお伝えしています。
- ボランティアの方は、作業スピードは最初こそ早くないですが、「**農家を応援しよう**」と一生懸命、丁寧に取り組んでいる姿勢が見られ、非常に感謝しています。

Q2. 援農ボランティアの取組みに参加して良かったことは何ですか。

- リピーターのボランティアの方は、作業内容をしっかり分かってくれており、非常に助かっています。**ボランティアの活躍によって作業効率は向上しています**。

（9）援農ボランティアの声

Q. 援農ボランティアへ参加したきっかけ、感想を教えてください。

- 友人からみかんの収穫をお手伝いするボランティアがあると誘われて、夫婦で参加しました。最初はどのみかんを収穫すればよいのか不安でしたが、**何度も参加することでみかんの種類の見分けもできるようになりました**。
- 改めて作物を育てることの大変さを知り、これからも農家さんを微力ながら応援したいです。



援農ボランティア参加者

事例の特徴

1. 援農ボランティアを希望する人に対して、行政と連携し、約2年間の事前研修を実施（広報には市広報誌を活用）
2. 受講者は事前研修終了後、JAと協力関係にあるNPO法人¹に会員登録し、援農ボランティアとしてだけでなく、地域農業振興のための様々な活動に参加

取組みの効果

1. 毎年約10~20名程度の農業研修講座の受講生を獲得している
2. 1年間で援農ボランティアは延べ約2,400人（1人が複数回参加）が参加しており、特に繁忙期での農作業人員の確保につながる
3. 援農ボランティアが所属するNPO法人がJA所有の農地で栽培を行うことで、直売所の充実や耕作放棄地の発生防止につながっている
4. ベテランの援農ボランティアが新規就農者の営農サポートをすることや、援農ボランティアがいることで面積拡大を行う農業者もいる

¹ NPO法人に関する詳細な内容はP9に記載



(1) J A相模原市の基本情報

- **所管エリア**：神奈川県相模原市（市内のうち城山町・津久井町・相模湖町・藤野町の旧津久井郡を除く）
- **主力品目**：ナス、キュウリ、トマト、人参、大和芋等

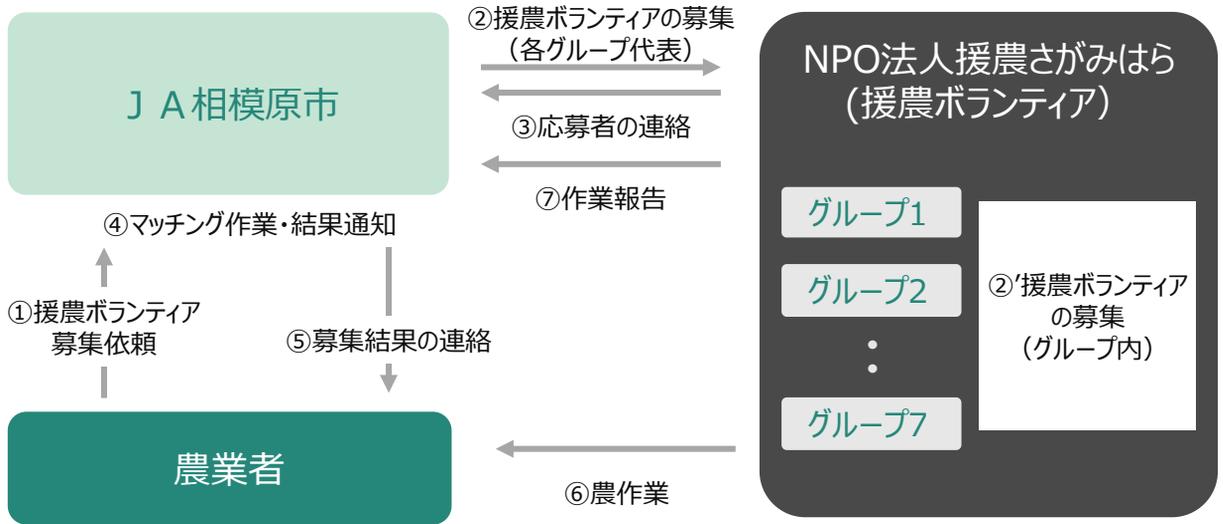
(2) 援農ボランティアの取組みについて

- **担当職員**：営農センター 営農支援課の職員 1名
（人手不足解消の取組みの従事割合：全体業務の6割程度）
- **ボランティアの対象品目**：野菜全般（ナス・トマト・キュウリ・人参・大根・牛蒡・玉ねぎ・オクラ・大和芋・さつまいも等）、水稻、果樹（ブルーベリー・ぶどう）
- **ボランティアの作業内容**：野菜全般（播種・定植・収穫・除草・施肥・農薬散布等）、水稻（播種・田植え・除草・収穫等）、ブルーベリー（除草・収穫等）、ぶどう（粒抜き・誘引・脇芽取り・袋掛け・摘果等）
- **ボランティアの特徴**：41歳~82歳まで幅広く活躍。会社員や嘱託員、パート、主婦なども参加
※ J A相模原市では、「援農システム」という取組みで援農ボランティアの取組みを実施しているが、本事例集では援農ボランティアと表現

(3) 取組みを始めた経緯

- 1994年に農地有効利用に関する調査をした結果、農作業の一部を委託したいという意見があった
- 農業を守るためには、農業を応援する新たな人材の活躍が不可欠と考え、1995年から取組みを開始

(4) 取組体制図



(5) 取組みフロー (詳細)

① 援農ボランティアの募集依頼	「農業者名、連絡先、援農日、作業内容、人数、集合場所、作業時間」に関する情報を記入した書類を農業者から J A に提出 (当 J A では農業者が記入する用紙を用意し、受領する形で実施)
② 援農ボランティアの募集 (各グループ代表)	NPO に所属する援農ボランティアの各グループを束ねる代表に対して、「援農ボランティアを募集している農業者の情報」を J A から発信
②' 援農ボランティアの募集 (グループ内)	各グループの代表者からグループメンバーに対して、「援農ボランティアを募集している農業者の情報」を発信
③ 応募者の連絡	各グループの代表者から応募がきた援農ボランティアに関する情報を J A に連絡
④ マッチング作業・結果通知	現在の募集状況について、J A から各グループ代表へ連絡 人数が集まらない場合は電話での連絡や農業者に確認し、研修生を含めて募集することの可否について確認
⑤ 募集結果の連絡	依頼した農業者に対し、援農ボランティアが決まり次第、人数が集まったことを J A から連絡 J A が参加報告資料を作成し、NPO 法人援農さがみはらに連絡
⑥ 農作業	農作業を実施
⑦ 作業報告	援農ボランティアから作業内容や時間に関する作業結果を J A に報告

参考 NPO法人援農さがみはらについて

1. 設立の経緯

- 高齢化や担い手不足の農業者を支援し、相模原市内の農業や農業者の活性化と街づくりに寄与することを目的に平成17年10月に設立

2. 組織体制

- **会員条件**
 - J A相模原市と行政で実施する農業研修講座の修了生のみが所属可能であり、
 - 活動を維持するための費用として年会費2,000円を設定
- **会員数**
 - 令和6年度の会員数は約75名おり、平均年齢は約69歳

3. 事業内容（J A相模原市との連携）

① 荒廃農地の防止（農地保全）

- 後継者のいない農家の休耕地・遊休地を管理し、一連の農作業を実施
⇒ J A相模原市が（農地中間管理機構から）借り入れている休耕地・遊休地を提供することで連携

② 農家の人手不足解消（援農）

- 農繁期における農家の人手不足を補うため、作付け・除草・収穫などの農作業を支援
⇒ J A相模原市に農業者から援農ボランティアの依頼があった場合に連携し、農業者に対する農作業支援を実施

③ 農業の啓発事業

- J A相模原市や農業者と協力をしながら栽培した野菜をJ Aを介して直売所や量販店などに販売し、地場野菜の重要性をPR
⇒ NPO法人援農さがみはらの会員で野菜や果樹栽培を行うなどのグループ活動（④の農業技術の研鑽）を実施しており、J A相模原市から要請のあった品目の栽培等を実施。農機具のレンタルをJ A相模原市で実施

④ 農業技術の研鑽

- 農協から受託した圃場や農地中間管理機構から個人で借りた圃場で各種農産物を栽培し、農業技術を研鑽

⑤ 福祉活動

- 野菜の収穫体験などに地域の子どもを招くことで、自然とのふれあいや食育の場を提供

(6) 特徴的な取組内容とポイント

① 援農ボランティア向け農業研修講座

2年間の事前研修を実施することで、即戦力で活動できる人材を確保し、農業者は他の作業に注力することができる

事前研修を実施することで、農作業を実際にできる人が集まる安心感を農業者に与えることができます。加えて、援農ボランティア希望者に対しては平日開催や最低参加日数などの事前説明を丁寧に行うことで、参加意欲の高い援農ボランティアを集めることができます。

Point

- J A から相模原市に対して、農業研修講座の事業計画を提出することで、運営費用の半額を補助してもらっています
- 事前研修である農業研修講座では、1年目に基礎技術を学ぶビギナーコース、2年目に農作業技術の向上を目指すサポートコースを受講してもらいます
 - ・ 研修回数：約2年間、座学を含む毎年約25回の育成講座を開催（水稻や野菜など、様々な作物で播種、収穫、出荷準備などを体験）
 - ・ 募集対象：管内在住の67歳以下の方を対象に毎年20名まで募集
 - ・ 研修講師：J A 相模原市に在籍する技術顧問が担当
- 農業研修講座の受講中でも、農業者の圃場で活動することや援農ボランティアに参加することもできるため、研修終了を待たずに農業者の支援の一部を担っています
- 万一に備え、研修生と援農ボランティアに対してJA負担で傷害保険に加入しています

② NPO法人の設立

NPO法人に援農ボランティアが在籍し、グループ単位での活動を推進することで、農業者・J A の支援につながっている

農業者と援農ボランティアのマッチングでは、各グループ代表が仲介に入ることでJ A として連絡が取りやすくなっています。加えて、クレーム対応等についてもNPO法人で対応してもらうことができるため、現場の対応を一元して依頼することができます。

Point

- NPO法人援農さがみはらは、農業者の高齢化や担い手不足の農業者を支援し、相模原市内の農業や農業者の活性化、街づくりに寄与することを目的に設立
- NPO法人援農さがみはらには現在約75名が在籍し、農業研修講座の修了生は原則在籍登録することとしているため、人材の循環ができるようになっています

③ 援農ボランティアによる地域・農業の活性化

J A が借り入れている農地で栽培を行い、直売所等で販売をすることで、農地保全や直売所の充実、J A の戦略作物の試験栽培の支援などを担っている

J A が農地中間管理機構から借り入れている耕作放棄地や休耕地一部を援農ボランティアのグループ活動に貸し出すことで、援農ボランティア独自の栽培活動を実施しています。栽培した品目は営農センターを通じて販売し、販売代金を資材購入や農機のレンタル費用に充当し、活動を行っています。

J A相模原市

(7) 担当職員の声

Q. 援農ボランティアの取組みを行うことによるJ A相模原市にとってのメリットを教えてください。



担当職員

- 以下の3点で取組み効果があります。
 - 援農ボランティアが収穫を支援することにより、**出荷や直売所の取扱量や品目が充実することにつながります。**
 - J Aが借り入れている農地を貸出し、その農地で援農ボランティアによるグループ活動（野菜の栽培等）を行っているため、**J Aで新たな品目を栽培・検証したい場合に協力を得ることができています。**
 - また、J Aが借り入れている農地で栽培を行うため、**耕作放棄地の発生を抑制することにつながります。**

(8) 農業者の声

Q. 援農ボランティアの取組みに参加して良かったことは何ですか。



農業者
(大和芋)

- 援農ボランティアがいたことで、10aから1haまで**規模を拡大することの決断ができ、今でも農業を続けられています。**
- 今でも年間延べ150人の援農ボランティアに来てもらい、**必要な時には1日で作業を終えることができるので助かっています。**
- **空いた時間を他の作業に回すことができるようになり、自分の時間を持つこともできるようになりました。**

(9) 援農ボランティア（NPOさがみはら会員/農業研修講座受講生）の声

Q. 援農ボランティアへ参加したきっかけ、感想を教えてください。

- **相模原市が発行している広報誌をきっかけに農業研修講座に参加。もともと土いじりが趣味であったが、全くの素人であったため、農業研修講座に関心を持った。座学で農業に関する用語を学ぶことに加え、実地研修を通して、土作りの楽しさや収穫の喜びを知りました。（男性）**
- **女性会に参加していて、もともと農業に関わりたいと思っていたタイミングで農業研修講座の存在を知り、参加しました。（女性）**



援農ボランティア
参加者

3 援農ボランティアへの育成講座に加えて、 J Aで独自開発したマッチングシステムを活用している事例

事例の特徴

1. 援農ボランティア希望者には育成講座説明会、年10回程度の育成講座を実施後、援農ボランティアとして登録
2. 独自のマッチングシステムを活用して、マッチング業務の効率化を実現

取組みの効果

1. 120名以上の援農ボランティアが育成講座を修了しており、農業者の指導負担の少ない援農ボランティアの育成が行われている
2. マッチングシステム導入により、J A担当職員の業務負担が軽減され、利用者の連絡のしやすさが向上したこともあり、援農ボランティアによる活動時間が大幅に増加



(1) J A セレサ川崎の基本情報

- **所管エリア**：神奈川県川崎市
- **主力品目**：小松菜、ほうれん草、トマト、梨、いちご 等

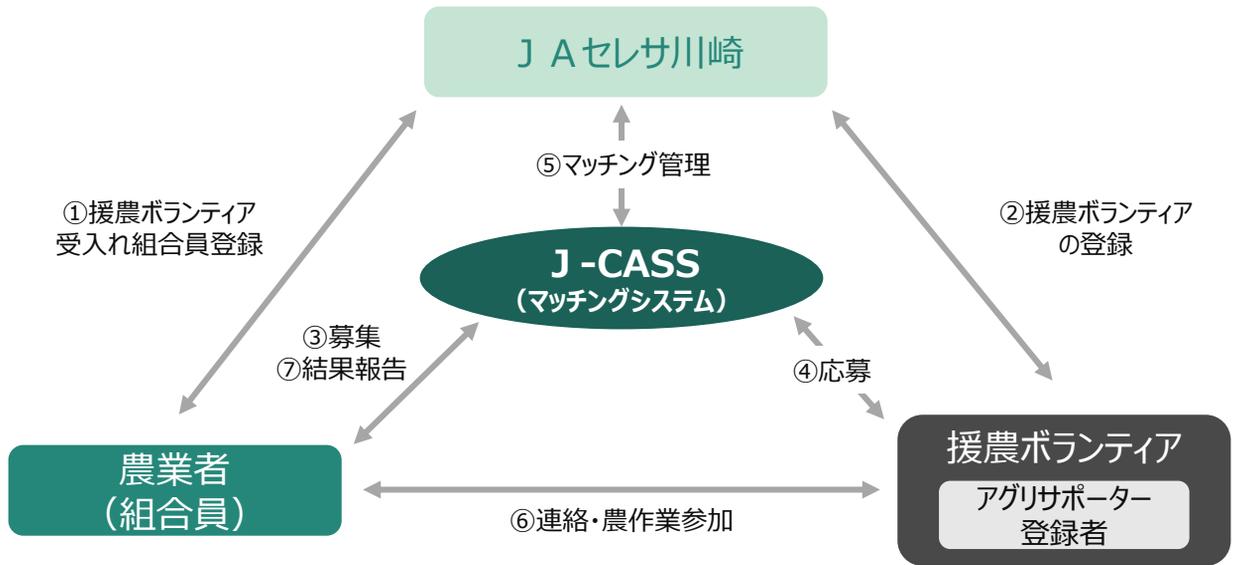
(2) 援農ボランティアの取組みについて

- **担当職員**：営農経済部 営農支援課の職員 2名
(年間従事割合：全体業務の4割程度で農繁期にそれほど左右されない)
- **ボランティアの対象品目**：小松菜、ブロッコリー、トマト、ナス、梨、みかん、柿、いちご、切り花 等
- **ボランティアの作業内容**：除草作業、収穫、出荷準備、仕分け、果樹の摘果、苗の植付け、種まき、野菜の手入れ、防鳥ネット張り、剪定枝拾いなど ※農機を使う作業は含まない
- **ボランティアの特徴**：50代-60代が中心であり、女性比率が高い

(3) 取組みを始めた経緯

- ・平成25年度から、労働力に関するニーズ把握を目的とした川崎市農業実態調査やJ Aセレサ川崎独自のアンケートで援農ボランティアのニーズを確認しており、平成28年度にはJ Aセレサ川崎第二次地域農業振興計画に「援農ボランティア育成・活用」といった内容を記載していた。平成30年度にはアグリサポート課を新設し、農業支援事業を開始
- ・令和2年に川崎市民を対象に「アグリサポーター（援農ボランティア）」を募集し、育成講座を開講育成を修了した第一期生49名は、無償の援農ボランティアとしてJ Aに登録し「アグリサポーター」と称して、令和3年3月より活動を開始
※ J A セレサ川崎では「援農ボランティア」を「アグリサポーター」と呼称するが、本事例集では「援農ボランティア」と表記

(4) 取組体制図



(5) 取組みフロー (詳細)

<p>① 援農ボランティア受入組合員の登録</p>	<p>援農ボランティア事業の利用を希望する組合員は、登録用紙を J A に提出。組合の支部単位や出荷者会議での周知、TACによる巡回訪問などで援農ボランティアの利用を促進</p>
<p>② 援農ボランティアの登録</p>	<p>准組合員向け機関誌やHPで広報し、希望者は「援農ボランティア育成講座説明会」、「援農ボランティア育成講座」の参加を経て、援農ボランティアとして登録 → 本事例 (6) ①に追加説明</p>
<p>③ 援農ボランティアの募集</p>	<p>農業者は J Aセレサ川崎独自のマッチングシステムJ-CASSにログインし、「日時・作業内容・集合場所・必要人数等」の必要事項を入力して援農ボランティアを募集 → 本事例 (6) ②に追加説明</p>
<p>④ 応募</p>	<p>援農ボランティアもJ-CASSにログインし、掲載されている募集中の作業を確認し、希望する作業・農業者を選択して応募 → 本事例 (6) ②に追加説明</p>
<p>⑤ マッチング管理</p>	<p>応募があるとシステムで自動的にマッチング、結果が援農ボランティアに通知される。J Aは、農業者と援農ボランティアのマッチング状況を確認し、キャンセル等問題があった際のみ対応 → 本事例 (6) ②に追加説明</p>
<p>⑥ 連絡・農作業参加</p>	<p>上記のマッチングした活動については、農作業を実施。緊急連絡等が必要な場合、J-CASS内に搭載されているチャット機能で、農業者と援農ボランティアの間でお互いに連絡を取り合うことが可能</p>
<p>⑦ 結果報告</p>	<p>農作業終了後、農業者はJ-CASS上で作業日時、作業内容、個々の出欠、特記事項を入力し、J Aに作業結果を報告</p>

(6) 特徴的な取組内容とポイント

① J Aによる事前講習を実施

援農ボランティア希望者に、J Aによる育成講座（実地研修）を実施

援農ボランティアの育成が主目的ではあるものの、農業者が円滑に援農ボランティアを受け入れることができるように育成講座説明会と育成講座を実施し、援農ボランティアの適性を見極めます。また、援農ボランティアとJ A担当職員の相互理解を深められるというメリットが育成講座にはあります。

Point

- 講座受講前に説明会を開催し、その後講座への応募ができる仕組みとしています。応募したら必ず講座に参加及び援農ボランティアに登録できるわけではないことを申し伝えることにより、より適性のある方に援農ボランティアとして活動してもらえるよう工夫しています
- 育成講座に一定数出席した者のみを援農ボランティア（アグリサポーター）として登録します。全くの初心者を受け入れる場合と比較して、ある程度の知識・経験を持った援農ボランティアが農作業に参加することで、農業者の負担が少なくなるようにしています
- 万が一の怪我や事故等に備えて、J Aが費用を負担し、援農ボランティアは育成講座受講時から「ボランティア活動保険」に加入

② 独自のマッチングシステムの活用

農業者と援農ボランティアのマッチングを独自のシステムにより実施

独自のマッチングシステム「J-CASS」を用いて、援農ボランティア事業に取り組んでいます。従来はJ A職員による手作業でマッチングをしていましたが、システム導入により業務負担が軽減され、利用者側にも、作業依頼・応募時間の拡大といったメリットがもたらされています。

Point

- 農業者、援農ボランティア、J Aのみが利用できるチャット機能をJ-CASSに搭載することで、円滑に連絡を取ることが可能
- J A担当者は農業者と援農ボランティアの連絡内容を閲覧できるため、迅速なトラブル対応が可能
※やりとりをJ Aが確認できることは、利用者も認識
- J-CASSは24時間稼働しているため、作業の合間や夜間等、農業者・援農ボランティアともにライフスタイルに合わせた利用が可能

③ 金銭的負担の明確化

金銭の授受（交通費含む）は行わない方針

無償の援農ボランティアとして事業を展開しているため、交通費及び農業者から援農ボランティアへの金銭での謝礼は明確に禁止しています。

(7) 担当職員の声

Q1. 援農ボランティアの参加者の募集が増加するきっかけはありましたか。

- 取材の申し込みを受け、**地域情報誌タウンニュースに取り上げられた際は、援農ボランティアの応募者が大きく増加しました。**
- また、最近**は援農ボランティアからの口コミ**で、応募する人も出てきています。



担当職員

Q2. 援農ボランティア事業にはどのような期待を込めていますか。



担当職員

- 取組当初、“援農ボランティアのモチベーションは何か？”悩ましい点があり、何か対価を渡すことも考えていましたが、ふたを開ければ**物的な対価は必要とされていません**でした。
- 実際には、「農」を通じたコミュニケーションにより、**農業者・援農ボランティアともに楽しみながら作業**してもらっています。
- 今後の展望としては、**農業スキルを身に付けた援農ボランティアがさらに活躍できる場を創出して**いきたいと思ひます。また、市内の団体・企業と連携することで**本事業を発展させて**いきたいです。これらの活動を通して、**援農ボランティアが販売農家まで成長することも期待**しています。



4 企画部門が援農ボランティアの取組みを立ち上げ 准組合員から援農ボランティアを募っている事例

事例の特徴

1. 企画部が所管し、准組合員の地域農業参画を推進する取組みとして企画したことで、スムーズに援農ボランティアの取組みが立ち上がった
2. 花ハスの出荷作業やいちごの収穫・シーズン後のハウス内片付けなど、特に人手が不足する短期間の募集で効率的に取組みを継続している

取組みの効果

1. 花ハスでは約5名、いちごでは約20名の援農ボランティアが毎年参加。多くが新規参加者であり、准組合員の地域農業参画の機会となっている
2. 援農ボランティア参加を経て、パートへ転身する援農ボランティアも存在しており、農業における慢性的な人手不足改善にもつながっている

(1) J A あいち海部の基本情報

- **所管エリア**：愛知県津島市、愛西市、あま市、弥富市、蟹江町、大治町、飛島村
- **主力品目**：れんこん、トマト、いちご、赤しそ、花ハス 等

(2) 援農ボランティアの取組みについて

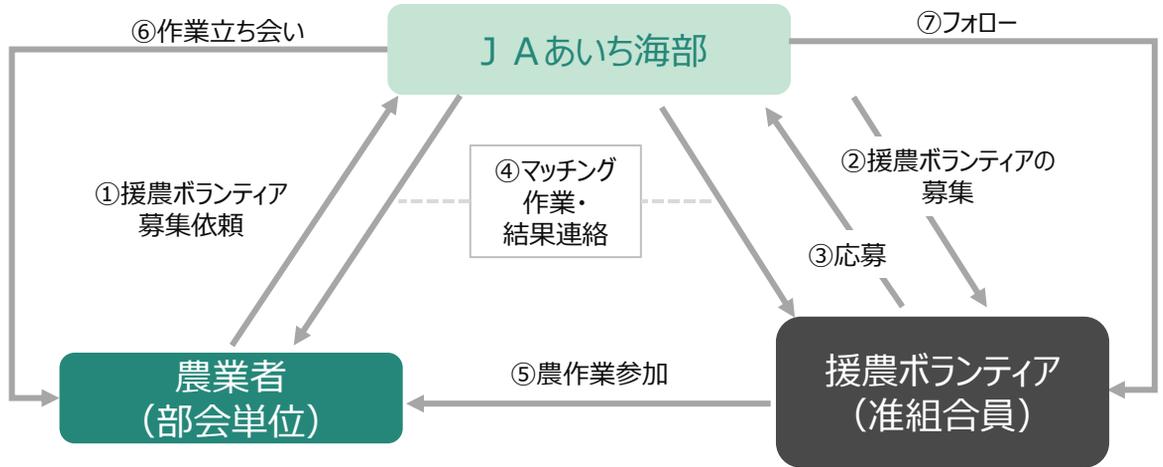
- **担当職員**：企画部企画課 2名・北部営農センター園芸課 2名（年間従事割合：全体業務の1割）
- **ボランティアの対象品目**：花ハス、いちご
- **ボランティアの作業内容**：花ハス（収穫・出荷作業）、いちご（株切り・収穫）
- **ボランティアの特徴**：准組合員を対象に実施しており、男女偏りなく参加。40～80代と幅広い年代が参加しており、中でも70代の援農ボランティアが多い



(3) 取組みを始めた経緯

- 部会担当職員経由で、花ハスの部会員から人手不足の声を聞いた企画部職員が、援農ボランティアの取組みを部会へ提案し、2022年度より取組みが開始された
 - 人手不足に対応するため担い手課で無料職業紹介事業を推進していたが、十分に人が集まらない状況であった
 - 取組開始時は、花ハス部会の役員に援農ボランティアを一度受け入れてもらい、援農ボランティアの取組みが有効であることを確認し、部会全体の取組みへ拡大
 ※花ハス部会の部会員は11名（2022年時点）
- 花ハス部会での取組み成功を受け、2023年度からはいちご部会においても取組みが開始された
 - 花ハス部会での取組み開始時と同様に、企画部は部会担当職員経由でニーズを把握
 ※いちご部会の部会員は60名（2023年時点）

(4) 取組体制図



(5) 取組フロー（詳細）

① 援農ボランティアの募集依頼	援農ボランティアの受入れを希望する農業者について、「連絡先、援農日、作業内容、受入可能人数、作業時間」に関する情報を部会役員・部会担当職員が企画部と連携して収集
② 援農ボランティアの募集	HPやSNS、各支店へのチラシ提示、 J A あいち海部の公式LINE(約7,000人が登録) 等を活用して広報し、ボランティアを募集
③ (援農ボランティアによる) 応募	参加希望者は、申込用紙または応募フォームから応募
④ マッチング作業・結果の連絡	J A がマッチング作業を行い、受入れ部会に対して、日程ごとの参加希望人数を連絡（参加者を受入れ、農業者ごとに振り分ける際は、部会役員・部会担当職員が調整）し、援農ボランティアにも作業日を連絡
⑤ 農作業参加	参加者はJ Aの集荷場に一度集合し、J A職員による簡単なオリエンテーションに参加する。その後、作業場へ移動してもらう オリエンテーションでは、作業内容だけでなく、 援農ボランティアの活動が「収穫体験会」ではなく、地域の農業者の手助けをする活動である旨を説明
⑥ 作業立ち会い	作業現場では、企画部の職員1名以上が活動に立ち会う 事前に地元メディアへプレスリリースを発出、取材申し込みのあったメディアへの対応も実施
⑦ フォロー	ボランティア参加者に対して、簡単なアンケートを実施。また、既定の交通費の支払い処理等を実施（負担は農業者）

(6) 特徴的な取組内容とポイント

① 企画部が主導する援農ボランティア

准組合員とJ Aの関係強化、准組合員と地域農業の関係強化を推進する企画部が主体となって、援農ボランティアの活動をスムーズに立ち上げられた

援農ボランティアの取組みを地域住民・准組合員の農業参加の機会と位置づけることで、取組開始に向けたJ A内の合意を得やすくなります。また、農業者は自身の負担が小さい範囲であれば、地域の活動に協力的で理解も得やすいです。

作業当日にはJ Aから参加者に対して簡単なオリエンテーションを実施し、作業内容だけでなく、援農ボランティアの活動が「収穫体験会」ではなく、地域農業を支援する活動である旨を伝えています。

Point

- J Aの地域貢献活動として援農ボランティアの取組みを位置づけることで、関係各所から取組開始の理解を得やすいです
- 援農ボランティア参加者に対して作業直前にオリエンテーションを実施し、「収穫体験会」にならないように工夫しています
- ボランティアを経て短期パートになることを推奨している部会もあり、農業者、パート従事者、援農ボランティアが共に同じ会場で作業をすることで適切な交流が実現しています
・実際にボランティア活動を経てパートとして活躍する方もいます
- 准組合員であることを参加の前提としているため、参加希望の准組合員が友人等を誘いボランティア参加を促すことで、結果として准組合員の人数増加にもつながっています

上記の他、援農ボランティアに対し交通費として一律1,000円支給できるよう組合予算から拠出するとともに、万一来に備え、JA負担でボランティア保険に加入するなどのサポートを行っています。

(7) 農業者の声

Q. 援農ボランティア参加者の活動ぶりはどうですか。

- 手伝っていただいているのは出荷作業のみではありますが、**満足しています**。農業に関心を持ち、ボランティアとして手伝っていただけるだけで十分助かっています。
- 農作業未経験の方でもすぐに対応できるような作業をお願いしており、農作業スキルについてはあまり重視していません。
- ボランティアの方には、パートとしてでもよいのでできれば継続的に農作業へ従事していただき、より経験が必要な工程にも携わってほしいと考えています。



農業者
(花バス)

(8) 援農ボランティアの声

Q1. 援農ボランティアへ参加したきっかけは何ですか。

- **LINEでの広報**を通じて J A あいち海部の取組み、花ハスでの援農ボランティア募集を知りました。長く准組合員であり、もともと農作業自体への興味関心がありました。
(Aさん 70代)
- **友人に誘われて参加**しました。参加にあたって准組合員になるハードルはあるかもしれませんが、費用は少額であり自身にメリットもあったので、私にとってはそれほど負担と感ぜませんでした。
(Bさん 70代)
- **LINEでの広報**を通じて援農ボランティア募集を知りました。**もともと地域のボランティアに参加しており、地元の特産品であるれんこん栽培**に関心がありました。(Cさん 40代)

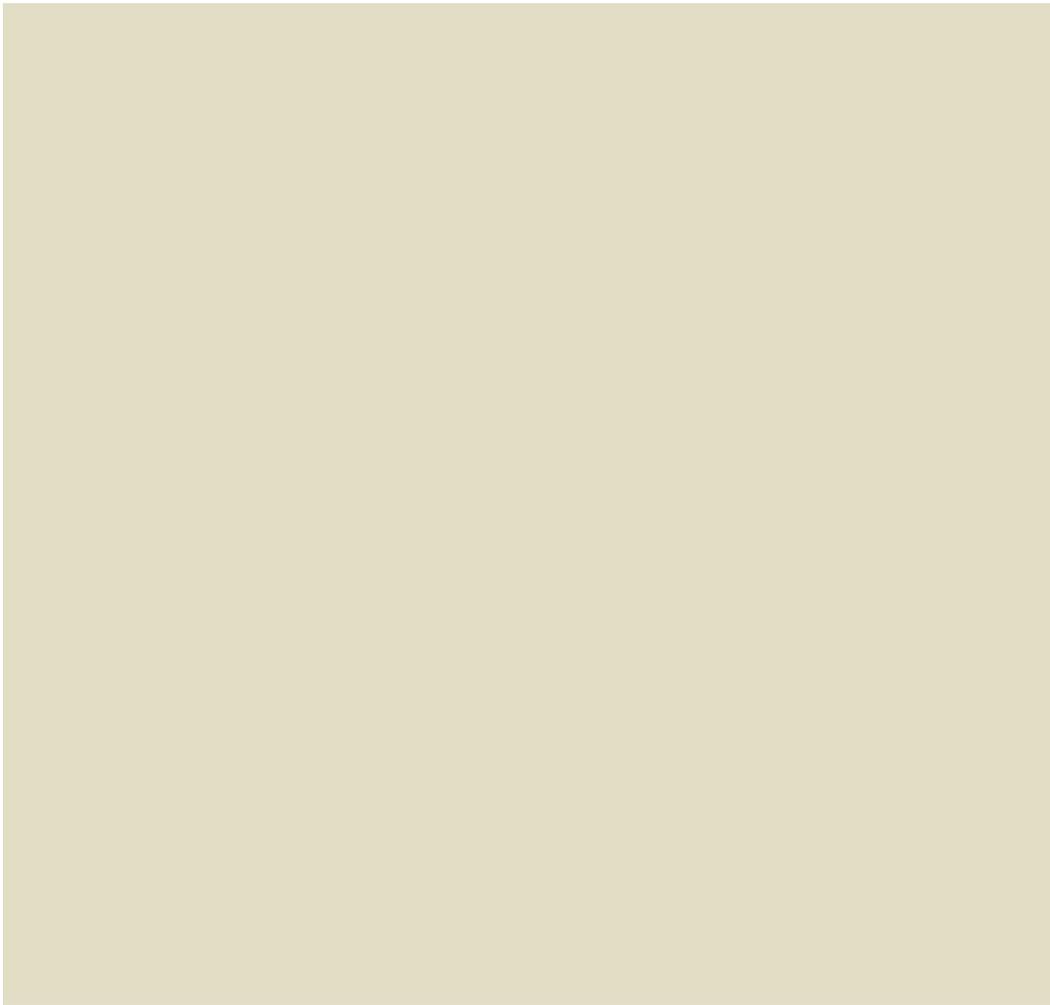
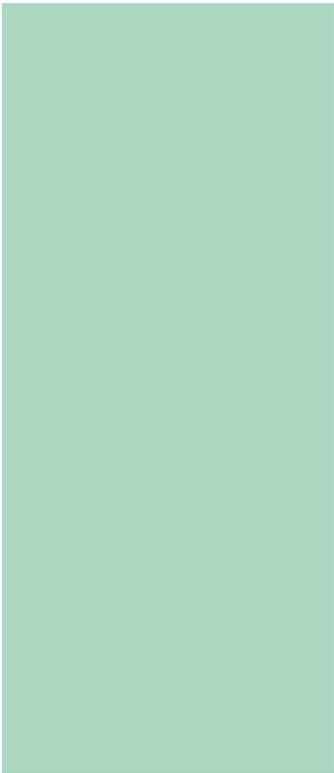
援農ボランティア
参加者

Q2. 援農ボランティアへ参加した感想を教えてください。

援農ボランティア
参加者

- 作業は単純作業で、また、周りの方に**丁寧なアドバイス**をもらいながら作業に慣れていくことができました。来年も日程次第で参加したいと思います。(Aさん 70代)
- 屋内作業と聞いていたが、クーラーのない集荷場での作業だったので、想定よりも暑く疲れました。休憩時間に飲み物をいただいたこと、また、**作物のお土産をいただいたことはとても嬉しい**です。
(Bさん 70代)





本誌内容に関するお問い合わせは、JA共済総合研究所調査研究部(03-3262-9655)までご連絡ください。

Copyright © JA Kyosai Research Institute (JKRI)